

# 1. 明日に向って — 技研展望 —

O.B 小 野 龍 弥

今や技研は好むと好まざるとにかかわらず20年目を目指しているが、果して10年の歳月に得たわれわれの知恵とは何であつたろうか。

探検家と称する人種はそのもつ歴史に於いて、地球上の神秘のベールを引き裂き、素朴なる民族にあらゆる物質文明と疾病を憂延させる先達であつたし、あまつさえ略奪者となり果てる者さえあつた。

現在に於いては困難な岩壁に登るにスポンサーと契約して名声と高利を欲し、探検と称して異民族の文化財を持ち帰っては商売を目論む者さえいる。

これら探検という錦の御旗の下に、大いなる開拓精神を発揮した結果が、自然との調和を破壊し、自らの生命をおびやかされるようになったのであるから、探検家とは世にも罪深い人種である。

今日の世相の混乱を見るにつけ、人類がもはや物質文明を中心とした繁栄の極みに達していることは明白であり、今後この愚行が続く限り、地球の生物を滅亡に追いやるのは加速度的に近いと云えよう。

もはやわれわれは探検の存在を宇宙に限り、この地上に於いては探検の名を返上しなければいけない。われわれはおゝらかなる自然界への愛を最も尊ぶ人間であるべく指向する者としての方策を求めるべきである。

地道に自然の美を守り育てることによって、将来人々の心が潤い、いづれの日か自然を破壊することなく、人類が地上の樂園を造ることを夢に描いて、絶望でなく努力を始めなければならない。

技研の目的には征服されるべき自然はなく、守り育てるべき自然と己との調和への努力があるのみである。

# 2. 新たなる日々によせて

O B 宮 本 義 海

○新たなる日々によせて

昨年9月、梅田の喫茶店に集まった我々は、いつになく厳しい、そして当

感気な会話を続けていた。技術研究会解散。その席上、私の頭に去来したものの、それは、新人の夏山、厳冬の槍北鎌、吹雪の利尻岳……すべて過去の日々のことであった。その技研が解散することの意味は果して何だったのだろうか。一昨年来の大学粉争は探検部にとって、近年にない大きな試練であった。大学の課外活動としての探検部であれば、当然のことであったかもしれないし、部自体が組織の改革を行ない、あわせて、極度の部員不足からして、技研の存続を新ためて考えてみる必要もまた当然であったろう。その後、我々がみいだした結論は、技研の解散、そして新たなる探検部山岳グループとしての出発であった。ここに10年間の技研はその歴史をとじ、新たなステップを踏みだすべく、その踏台として、今夏、アラスカ合宿を実現させることになった。これからも我々は山と戦い続けることはまちがいないが、それをどうとらえるのかはこれからの10年を経てみなければ判らない。しかし少くとも、これまでの原動力であった。バイオニアワークは受けつがれていくであろうし、狭いセクショナリズムを捨て、より広いフィールドに踏跡を残すであろう。幸にも、現役、OBの交流も深く、行動力も養われてきている。我々は必ず、10年後、もっともっと汚れた街の片隅で、あれで良かったのだと歎びあっていたいと思う。唯、その日のために、我々はこれまでを振り省り、同時に、一層の情熱を燃やさねばならない。

#### ○東京からの便り

「1965年、アンデス遠征隊を山岳部との合同と云った型であれ、海を渡った技研が、以後、今日まで遠征を実現しえなかったことには、それなりの背景があったからであろう。しかし、これらは応々にして、過渡的云々として、個々人の中で片付けられてきたただけであり、組織としては何等消化されていなかった。又、技術、精神力、物質的可能性と云った種々の現実を、あまりにも考えすぎてきた感すらある。現実を目をむける時、いつしか遠征は他人のこととなってしまっているはいないだろうか。しかし、技研が地理的探検をめざしてきたことを否定することは出来ないし、であればこそ、黒部の水

とも戦い、利尻岳、知床と踏み跡を残してきたのではなかったのか。もし、今現実を忘れ、とにかく一つの目標を設け、いきつくところまでいってみるとするなら、それは試行錯誤にしかすぎないのだろうか。自分もしくは技研は、果して何をめざし、何を欲っているのかを、新ためて問う、ことを、今やらねばならないのではないか……」これは私が卒業して、職を東京にみつけた頃、東京から大阪の仲間に送った手紙である。海外だけが我々のフィールドではないことを知りながらも、探検部の中における技研、しいては、技研自身の存在を問う時、あまりにも夢が無さすぎる様に思われてならなかった。しかし、昨年夏以来、定期的会合を持つようになってから、現役OB合同の冬山合宿を、槍ヶ岳～西穂高に展開するに至り、サウス・ジョージア島計画の研究、さらには、アラスカ合宿は、もはや目前のものとなっている。こうした今、この手紙を読みかえす時、何と口はばったい文章であり、若輩の戯言であったのかとはずかしい思いをしている。技研精神は決して枯れてはいなかったのである。

### ○組織の力と構成

我々は、関西大学探検部技術研究会と云う組織を基盤とした山岳活動を行なってきた。これは、誰しものが、人間一人の力の弱さと、1人プラス1人の力が、3人分、4人分の力となることを、その経験から学んできた結果である。しかしながら、組織している個人個人が、常に前向きであるならば、そのパワーは強力なものとなるであろうが、足なみが乱れた集団は、むしろ、一人の力さえ生かすことは出来まい。技研はこれまでの多くの年をメンバー不足に悩まされてきたが、かと云って頭数をそろえんが為に、方針・理念を曲げ、統制を乱すことは絶対に避けるべきであり、例え、二人、三人でも、志を同じうする者のみで、それぞれの力を出しきった型で活動が続けていくべきである。話は前後するが、一昨年来の大学紛争は、大学外の我々が想像する以上の試練であったようだ。そして、その試練は、学生の課外活動にもおよび、探検部もまた大きな屈曲点に立たされたことは皆が周知のことである。そし

て、我部においては、組織改革——技術集団から企画集団へ——として表面的変化をなすことになった。このことの是非は以後事ある毎に論じられ、さらに変革されたが、これらの流れの中で、最も不可解なことは、関大探検部が持つ、ユニークさ、パーソナリティまでもが、批判にあがったことである。探検や山岳活動にかぎらず、人間が何かを追求していく時、そのもののとらえ方、あるいは志向方法には、最良というものはなく、むしろ、いろいろなアプローチがあってあたりまえなのである。だからこそ、〇〇会はどうだ、××大学探検部はスポーツ的色彩が濃いか、それぞれのパーソナリティが話題になるのであって、探検と名のつくクラブが、西も東も同じ形態、考え方をしていたとしたら、それこそ、精神的貧困の末期的症状である。あくまでも、関大探検は、他に追随することなく、そのカラーを保持続けるべきなのである。又、あくまでも集団は、同志向者の集まりでなければ、組織としてのパワーを発揮することは出来ないのである。しかしながら、こうした歩みの途上には、避けることの出来ない摩擦、あるいは、お互の切嗟琢磨から生じる意見の相異はいつの時にもあるものである。そこに、組織に於ける指導の重要性がでてくるのである。それでは、真の指導とは一体何であり、指導力とは、何が力となるのであろうか。この問題は、あまりにもテーマが大きく、それぞれの考え方も千差万別であらう。しかしながら、あらゆる場合に於いても必要なことは、組織する者全てが指導者であり。行動、実践が最大の武器であることは云えるのではないだろうか。そのためにも先ず、各人が任務をわかちあい、一層の協力体制を築き上げる必要があるのではないか。社会が多岐複雑になるにつれ、技研もまた、その守備範囲は広がっていくであらう。これからは、もはや、少数人間のみによる運営は頭打となっていくようである。

#### ○システム・アプローチ

人間何かを志すとき、そこにはおのずとアプローチがある。これは時として意識の潜在下にある場合が多い。そして、已とその目標との間が、時間的、

空間的により遠い距離にある程に、顕在化してくる。それは、効率的、安全的なアプローチを辿らねば、とうてい実現し得ぬ場合である。

技研は、発足以来、地道な種重ねのなかから今日の技術を習得してきたのであり、決して一夕に現在があるのではない。そこには、その年々の部員の努力があったのである。そして、今や、海外の山々すらも征服しようとするところまで成長した。しかし、技術は限りのあるものではなく、又、時の流れは、我々の歩むスピードよりはるかに速く、レベルも上がっていく。加えて、我々のフィールド自体が、これまた異常な早さで狭くなり、我々の活動そのものが前時代的だとすら云われるようになってきている。一方、我々の活動は常に生命の危険にさらされていることは避けられない事実である。こうした背景にあっては、我々は日々の活動をもう少し系統的に行なっていく必要があるのではないだろうか。その一つとして、会としての長期計画の立案、そして、それにそった新人からOBへの段階的指導カリキュラムの作製も効果があると考えられる。これはこれまでににおいても幾度となく論議されてきたが、この機会にもう一度研究してみるべきであろう。唯、重要なことは、これらの計画、カリキュラム等が個人を縛る為のものであってはならないと云うことである。(1971.2.)

## 事 故 報 告

昭和43年夏期合宿ストーブ引火事故

### 合宿概要

探検部技術研究会夏期活動として7月16日より28日迄、北アルプス剣岳にて岩登り訓練を行なったのち、29日より8月9日迄黒部川支流祖母谷並びに祖父谷全域を溯行し、冬期合宿の偵察の為、8月10日より唐松岳五竜岳並びに鹿島槍ヶ岳を経て国鉄信濃大町駅にて合宿を解散する予